



石川県リハビリテーションセンターニュース

目次

「使っている手」と「使える手」	1
平成22年度 リハビリテーションセンター研修会報告	2
バリアフリー推進工房の活動	3
平成22年度 石川県難病相談・支援センター事業実施状況 (4月～1月)	5
平成22年度 石川県高次脳機能障害相談・支援センター事業実施状況 (4月～1月)	6

「使っている手」と「使える手」

主任技師(作業療法士) 東 ひとみ

手は、物の確認や支え、繋ぎ手、物を掴む、操作する、手話などの記号としての役割、時には顔を洗う時に水をすくう道具としても使っています。私達は目的に応じて、意識することなく手を使って生活していますが、生まれてからすぐに、そのように手を使っているわけではありません。なぜなら、赤ちゃんが、首がすわって、寝返り、お座りができていくように、手の使い方にも発達過程があり、毎日の生活の中で手の使い方を習得しているからです。また、手を使うためには、肘や肩の動き、体の支持性などが重要であり、身体の状態によって手の使い方変わってきます。

最近「スプーンで上手く食べ物をすくえない」、「箸が上手く使えない」、「鉛筆の持ち方がおかしい」、「はさみを上手く使えない」など、手を使っているけれど上手く手を使えていない子ども達の相談が多くみられます。実際に子ども達の「使っている手」の動作を確認すると、機能障害だけではなく、手の使い方が未発達なことが原因になっていることが多いように感じます。このような子ども達に対し、当センターでは周囲の方々に手の使い方にも発達過程があることを説明し、各過程に応じた対応や次の過程に移行できるような関わりの必要性を伝えます。そして、その具体的な対応方法を支援しています。発達過程を促すための特別な訓練をするのではなく、生活動作や作業活動(学習、製作活動、遊びなど)を行う中で、道具を工夫した正しい持ち方での動作を誘導することや、できるようになったら次の過程に即した道具に変更するなど、子ども達の動作を確認しながら、周囲の方々と一緒に取り組んでいます。同時に、手を使うときの姿勢や環境についても確認していきます。その結果、子ども達は、徐々に手の使い方を習得し、上手く「使える手」になっていきます。そのことは、食事場面等だけではなく、ボタンのかけはずしが上手くなった、姿勢がよくなったなど、生活の中でも色々な変化として現れます。

もう一度、「使っている手」の動きを深く観察して「使える手」になっているか見てみて下さい。

地域リハビリテーション研修会

平成22年10月10日（土）に当センター大研修室にて、「在宅障害者の生き甲斐作りへの新たな取り組み」をテーマに開催致しました。障害をもつ人々が、住み慣れたところでそこに住む人々ともに一生安全に生き生きとした生活をおくることが高齢社会において切実な課題となっています。しかし、在宅障害者に対する生き甲斐作りの取り組みはいまだ十分とはいえず、要介護度の悪化や介護サービス費用の増加を招いているケースをしばしば見受けます。そこで、今回の研修では、県内で積極的に通所サービスを実践されておられる2つのサービス事業所より現状の取り組みと課題についてご報告頂き、その後全国で先進的に実践されている夢のみずうみ村の代表である藤原茂先生にユニークな生き甲斐づくりへの取り組み内容についてご講演を頂きました。

藤原先生は講演で、在宅障害者に対し自己選択、自己決定の機会を増やし、不便さがあっても生活できるノウハウを身につけ、生きていくことに不安がない状況をつくる事が大事だ、そのためには通所サービスで自信を獲得できるようにすることが重要で、目標を段階づけて「自分にもできる」という有能感や達成感につながる活動を提供し、自分の意志が働くようにすると、生き甲斐に結びつくのではないかと話されました。また介護場面でありがちな「過介護」をやめ、傍に寄り添い、できそうか否かを見極め、できないことのみ介助するやり方を提唱されました。

研修会には県内の通所サービス事業関係者が145名参加しました。セラピスト、介護福祉士、社会福祉士、看護師、介護支援専門員の他に事務職や営業職、精神保健福祉士等の参加もありました。

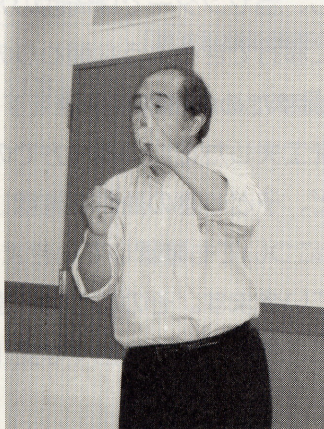
研修会参加者に、通所サービスを実践するにあたり課題に感じていることについてアンケートをとったところ（複数回答あり）、「実践するための知識や対応能力の不足」や「提供する人員不足」を挙げた人が最も多く、その他には「関係機関との連携が不十分」、「見合った報酬が得られない」、「個別プログラムの作成困難」等が挙げられていました。「利用者の意志を尊重してプログラムを選択しているか」との問いに「はい」と答えた人は半数以下（43%）で、「プログラムを定期的に見直しているか」との問いに「はい」と答えた人は56%でした。センターでは上記の結果を踏まえ、さらに在宅障害者のサービスにおける質的向上を図るため、実践に役立つ研修会を計画していく予定です。

◆ 現状報告「通所サービスにおける県内の取り組み」

報告者 介護予防通所リハビリテーションやわた健康スタジオ 主任作業療法士 杉浦 有子 氏
児童デイサービス キッズルーム キャロット サービス管理責任者 中川 等史 氏

◆ 講演「在宅障害者の生き甲斐作りへの新たな取り組み —夢のみずうみ村の取り組み—

講師 特定非営利活動法人 夢の湖舎 夢のみずうみ村 代表 藤原 茂 氏



藤原先生



研修会の様子

バリアフリー推進工房の活動

- 既製品では解決できない福祉用具や住環境の相談に対して、医療、工学、建築の連携により応援していきます。



手の機能にあわせて前方開閉するテーブルを設置し大学生活を送っています。



透明テーブルなので常時車いすに設置して高校生活を送っています。移乗するときには自分で車いすの横に下ろすことができます。

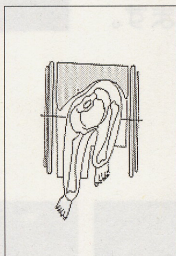
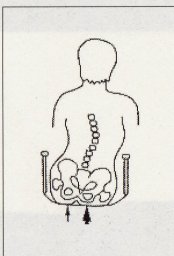
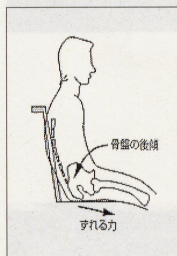


車いすを利用者にとって、姿勢の安定や生活場面での物の運搬、また手作業をしやすくするために、車いすにテーブルを設置することが多くあります。バリアフリー推進工房ではその方の身体特性に応じて自分で開閉でき、姿勢が確認できる透明テーブルを工夫しています。

このような医工学連携による技術支援や福祉用具の試用などを希望される方は、バリアフリー推進工房にご相談ください。

- 福祉用具や住環境に関する課題やニーズを当事者の方々とともに体系的に整理し、基礎研究や技術普及につなげています。

※車いすの座面の弛みを解決するクッションの開発

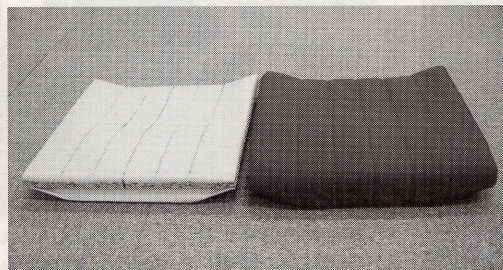


シートの弛みで臀部の傾きやねじれが生じ座位が不安定になります。



標準型車いすは座面と背面が2枚のシートで構成された簡便な折りたたみ式のためシートの弛みが生じます。高齢者や障害のある方がその弛んだシートに座ると、臀部が前方にずれ、体の側方への傾きやねじれが生じることが少なくありません。そのままの状態を続けると姿勢の変形、上肢作業への影響、呼吸や嚥下のしにくさ等々多くの

影響が生じてきます。今回シートの弛みを解消するための『船底タイプの芯材入りクッション』を開発しました。このクッションを弛んだシートの座面に敷くことで、座面全体に安定して座ることができ、姿勢改善につながります。また厚みも3cmと薄く移乗や駆動面にもあまり影響をあたえません。一度ぜひ試してみてください。



ベースには成形加工された塩ビ板を装着し、アンカ一部には硬質ウレタンを成形加工し前後差を滑らかな流線形状にしました。カバーは着脱式とし、裏面にラバー加工した防水タイプです。



■ 石川県の水族館・動物園が車いすで親しみやすくなりました☆☆☆

※ 『ジンベエザメがやってきた』 のとじま水族館がバリアフリーに！



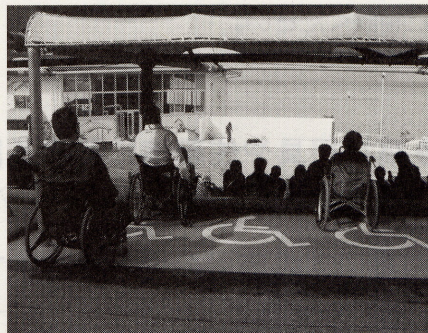
駐車場から水族館の入り口まではエレベーターやスロープになっています。多目的トイレにはベッドが設置され、また男女別トイレにも簡易車いす対応トイレが設置されています。



ジンベエザメ館は、らせん形のスロープになっており車いすで大水槽に近づくことができます。またイルカショーを見る観覧席にも車いす対応席が設置されています。

平成22年の夏に『ジンベエザメ館 青の世界』をオープンした、のとじま水族館がバリアフリー対応を行いリニューアルオープンしました。バリアフリー推進工房では、車いすの方や高齢者の方々をはじめみんなが楽しめる水族館を目ざし管理者である県民ふれあい公社の方々と一緒にバリアフリー環境の充実に努めました。

みなさんジンベエザメを見に、のとじま水族館に行ってみてください。迫力あるジンベエザメを間近にみることができます。



※いしかわ動物園ではライオンや虎を間近に！



いしかわ動物園ではライオンや虎のいるネコたちの谷や、イヌワシの谷をリニューアルオープンしました。洞窟に入り間近に動物をみることができますが、車いすの方も同じようにアプローチができます。

平成22年度 石川県難病相談・支援センター事業実施状況 (4月～1月)

1. 難病相談

相談方法	件数(延)	割合
電話	378	63.8%
面接	145	24.5%
電子メール	17	2.9%
訪問	52	8.8%
合計	592	100.0%

相談内容	件数(延)	割合
医療・治療	99	16.7%
病気・病状	93	15.7%
精神的支援	83	14.0%
介護・看護	20	3.4%
福祉制度	31	5.2%
就労・就学	19	3.2%
患者会	34	5.7%
医療費助成	23	3.9%
リハビリ、住宅改修、福祉用具の適合等	214	36.1%
その他	144	24.3%

※重複回答、割合は相談実数に対応

- ◆今年度は、昨年度に引き続き、笑いが心身に与える影響について実践的に学ぶ研修会をおこないました。また、音楽療法士を講師にお呼びし、音楽を実際に体験しながら楽しむとの主旨で、研修会を開催しました。
- ◆今年度になり、ヨガ教室の参加が増加しています。心身のケアだけでなく、難病患者同士の交流の場としても利用されています。
- ◆相談内容については、前年度に引き続き、リハビリ、住宅改修、福祉用具の適合が大幅に増加しています。当センターの支援の中で、必要に応じて石川県リハビリテーションセンター作業療法士等との連携が行えることが周知されてきた結果、相談につながりやすくなったためではないかと考えられます。病気や医療の相談に伴い、精神的支援の相談も多く寄せられています。日々病を抱えつつ生活を送る難病患者の方に対し、精神的支援の必要性が高いことがうかがわれます。

2. セルフマネジメント事業

日時	内容	講師	参加人数
毎月第1、3土曜日 午前中	心身をリラックスさせるヨガ体操	ヨガ研究所 (SCD患者)	257 (18回)
9月4日	セルフマネジメント研修会「笑いヨガと健康」	日本笑いヨガ協会 富田 ひろこ氏	36
9月22日	出張ヨガ教室 輪島	ヨガ研究所 (SCD患者)	9
11月2日	出張ヨガ教室 七尾	ヨガ研究所 (SCD患者)	8
12月4日	セルフマネジメント研修 「みんなで楽しむ♪Winter Music♪」	音楽工房ゆら 音楽療法士 塩崎 真希子氏	25

3. 難病研修会

月日	研修内容	対象	参加人数
10月24日	「網膜色素変性症の最新治療研究について」	九州大学病院眼科学 助教 池田 康博氏	76

4. 専門職研修会

月日	研修内容	対象	参加人数
	難病支援のための介護支援専門員研修 「神経難病を理解する」 国立病院機構医王病院 駒井 清暢氏 「神経難病の看護の実際」 国立病院機構医王病院 高橋 利津子氏 「難病患者を支える制度、難病相談・支援センター事業について」 難病相談・支援センター職員	介護支援専門員	
8月18日	能登会場		12
8月25日	加賀会場		57

5. 難病ボランティア育成研修会

月日	研修内容	対象	参加人数
9月19日	「脊髄小脳変性症、多系統萎縮症の方への対応の注意点について」 当事者とのふれあい 難病相談・支援センター職員	受講希望者	3

6. 難病患者生活支援啓発普及事業（患者自身が自分の病気を語る事業）

月日	内容	講師	参加人数
7月1日	「難病患者の体験談その①」 SCD友の会	金城大学 社会福祉学部生	182
1月21日	「難病患者の体験談その②」 色変ひまわりの会	県立看護大学 看護学生	80

平成22年度 石川県高次脳機能障害相談・支援センター事業実施状況 (4月～1月)

1. 相談事業

相談方法	件数(延)	割合
電話	364	62.0%
面接	183	31.2%
電子メール等	16	2.7%
訪問	24	4.1%
合計	587	100.0%

相談内容	件数(延)	割合
医療・治療	55	9.4%
病気・病状	49	8.3%
リハビリ	57	9.7%
障害の理解・対応	30	5.1%
生活	120	20.4%
対人関係	11	1.9%
精神的支援	148	25.2%
就学	6	1.0%
就労	158	26.9%
患者会	13	2.2%
福祉制度	23	3.9%
生活支援教室	45	7.7%
その他	111	18.9%

※重複回答、割合は相談実数に対応

- ◆ 高次脳機能障害相談・支援センターを設立して4年目になります。
- ◆ 昨年度に比べて相談件数が増加しており、特に就労に関する相談が多く寄せられています。障害者職業センター等とも連携しながら長期的に支援しているケースもあります。
- ◆ 退院後の在宅生活へのフォローに向けて、医療機関から当センターにつながるケースもあります。関係機関と適宜情報交換しながら支援をしています。
- ◆ 生活支援教室では、参加者が増え参加目的が多様化してきていることから、今年度からは午後を2グループに分け、個別の目標に応じた支援も実施しています。その他、参加者全員での外出(映画鑑賞、作業所の見学等)や季節の行事(クリスマス会)、学習会等を行っています。皆でカレンダー作りにも取り組みました。
- ◆ 今後も関係機関と連携しながら、ご本人・ご家族への支援に取り組んでいきたいと考えています。

2. 生活支援教室(生活する能力の向上を図るための教室)

日時	内容	スタッフ	参加人数
毎週水曜日 午前10時～午後3時	話し合い、対応、 認知レクリエーション他	作業療法士 保健師、臨床心理士他	延411 実16 1回 10.3人

3. 家族教室

月日	内容	参加人数
7月14日	「高次脳機能障害とは」リハビリテーションセンター 作業療法士 「家族会紹介」患者と家族の会「つばさ」	20
8月11日	「記憶・注意障害とその対応」リハビリテーションセンター 作業療法士	6
10月13日	「遂行機能障害、社会的行動障害とその対応」 リハビリテーションセンター 作業療法士	16
12月8日	「使える社会資源について」金沢医科大学病院 濱 大輔氏	8
1月12日	「就労支援について」金沢障害者就業・生活支援センター 松本 千春氏	9

4. 研修会(関係者対象)

月日	内容	参加人数
7月31日	「高次脳機能障害における地域支援ネットワークのあり方について」 静岡英和学院大学 白山 靖彦氏	40
11月13日	「高次脳機能障害の理解とリハビリテーションについて」 成城リハビリテーションクリニック 長谷川 幹氏 「家族としての体験談～可能性はゼロではありません～」 島根県脳外傷友の会・らぶ 西村 敏氏	104

編集・発行 石川県リハビリテーションセンター
〒920-0353 金沢市赤土町ニ13-1
TEL (076) 266-2860 FAX (076) 266-2864
E-mail iprc@pref.ishikawa.jp
http://www.pref.ishikawa.jp/kousei/rihabiri